

我々が計画したものはグリーンベルトを中心においてドドマの環境改善の成果を描き出すものである。グリーンベルト関係者、特にタンザニア人スタッフと協力してストーリーを決定した。それに際してスタッフの真剣な取り組みを見ることができた。筆者はタンザニア人が協力し合ってタンザニア人によるタンザニア人のための映画となるように努力している。

#### 6) セミナー

同じ意識・問題を持つ集団を作り一度に複数の人々に専門的な教育を施すこと、参加者による討論の場を持つことを目的に二代目の隊員によって始められた。表25にその経過を示した。

当初の出張講義以外はほとんどCDAオフィスを会場として行われた。また、座学の後でCDA苗畑や見本林・見本農場へ行き現場見学が行われるのが普通である。苗畑造成に際して公共施設の間を相手に行われたセミナーでは苗畑を起動するのに十分な効果があった。実際、幾つかの施設で苗畑造成の同意が得られた訳である。二代目の隊員はセミナーが最も効果を発揮するのは討論によってある合意点を得られることにあるとしていた。

ドドマ市内の村落林業関係者が一同に会してタスクフォース設置を合意をしたことは重要である。植栽普及を進める過程には種々の問題を解決していかなければならず、各組織・機関の協力と調整が必要であり、それはまた普及活動を円滑に行うのに役立つ。その調整機関がタスクフォースである。が、その場の合意が得られただけで、残念ながらその後の進捗が無い。

手当てとはセミナー参加者に支払われる出張手当てのようなもので交通費・飲食費に当てられる筈のものである。従って、参加者が必要とする食事と交通が賄われれば現金で支払う必要のないものと考えるが、筆者は'04年度に実施したセミナーの後で現金が渡されなかった事に対する参加者の一様な不満の声を聞いた。また、村落巡回の折りセミナーを望む声が、特に一度は参加したことのある施設あるいは個人から度々寄せられる。何故セミナーが必要なのか、その目的とするところに行き違いがあるのではないかと疑いを抱かざるを得ない。

#### 7) スタディーツアー

セミナーの一環として行われることもある。実地の見聞によって参加者は（施業）方法、目標に対してはっきりとしたイメージを把握することができ、それがまた植栽意欲向上につながると期待できる。表26にその経過を示した。

二代目の隊員が見本林設置の起動力を高める事を目的に行った際に、参加者に感想文を求めたものが残っている。実際その後に見本林設置がなされたわけであるからスタディーツアーが功を奏したと評価できる。しかしながら、他に閉じてはその後の参加者の動向に関して何ら調査が行われておらず、これがどれ程の効果をもたらすものなのか、単独の評価ができない。また、村落間における水・土壌条件に違いがあるため、他村・他地域の見本となる場所は必ずしも参加者の土地に適合する見本にはならないと筆者は考えている。

CDAのスタッフによるスタディーツアーは普及手法を学ぶことを目的としている。他プロジェクトの（進んだ）知識・方法の詳細を見聞・比較して今後の活動に活かされれば目的を達成したことになる。さらに、それがきっかけとなって種々のアイデアを出す意識が生まれれば、成功したことになると考えるが、まだそのような雰囲気は筆者は感じていない。

#### 8) 配布物

複数の人間を相手にスタッフ不在においても（と言っても顔の見えない活動ということではないが）常時普及が可能なものとして位置づけ、また村人のCDAに対する親密感を得るという目的を加味して筆者によって始められた。当初は時期ごとの施業を伝えることを中心とした新聞を考えていたが、明確な概念が生まれなかったことと時間的余裕が得られなかったため発行までに至っていない。しかしながら、'04年度に2種類の配布物に着手した。一つは小規模苗畑の施業方法を記した本で、苗畑造成を希望する人が自分で勉強できるようになっている。CDAの許可が得られなかったため'04年中の発行には至らなかったが、最近になって許可を得たので'05年度の苗畑開始に間に合うように発行する予定である。尚、これは筆者のカウンターパートが全面的に作業に当たった。もう一つはカレンダーの作成である。これもカウンター

パートのアイデアにより、時期毎の施策内容を絵で示したものとなっている。日本と違って表25. セミナーの経過

手当てとはセミナー参加者(聴講者)に支払われるものを指す。

時	対象者	目的・結果	手当て
'92 Apr.	Msalato bible schoolの生徒	森林の恩恵を知ることと植林の大切さを説く。 生徒のいる教室へ赴き45分の授業。	無し
'92 Apr.	Veyula キリスト教関係婦人	招かれて調養。植栽意欲喚起のため。	無し
'92 May.	教員(Msalato, Michese, Nala, Chihoni, Mvenge, Ihuwa, Nzuguni)小学校, Bihavana 中学校の農産担当教師	・ CDA村落林業部門の目的と活動の理解を求めめる。 ・ 各学校での苗圃造成の意向を固めめる。 Michese, Ihuwa, Msalato小学校, Bihavana中学校が希望した。	3,500 sh/1人
'92 Oct.	村議会(Nala, Chihoni, Ipala, Nzuguni, Ihuwa, Mbabala A, Msalato 村の 議長と書記長)	多党制導入により村のリーダーが替わる。当プロジェクトを円滑に進めるため、彼らにプロジェクトの目的と活動の理解を求めめる。 見本林に関する取り決めがなされた。	3,500 sh/1人
'92 Nov.	教員(Michese, Ihuwa, Msalato)小学校, Bihavana 中学校の校長	学校における苗圃活動が意欲的なものになるかどうかは校長の意向によるところが大きい。校長の理解を求めめるため。	3,500 sh/1人
'93 Jul.	苗圃開始を希望する農家、施設(Msalato 刑務所, Nala, Michese)小学校, Nzuguni診療所)の担当者	苗圃を開始するに当たっての育苗知識普及のため。	3,500 sh/1人
'93 Sept.	Dodoma市内で活動している村落林業関係者(CDA, DOVAP, MISITO UWENYEZI, MALIASILI WILAYA-MICA, 市水道局, 村長)	それぞれの仕事の紹介と意見交換。 タスクフォース(ドドマにおける植林活動グループ及びそれに関係するグループの調整機関)の設置を合意。	3,500 sh/1人 (開催費用は JOCVとSNVが折半)
'94 Sept.	Michese, Ihuwa村の環境委員会のメンバー Michese小学校を会場に。	村人による自主的な見本林施策が滞り無く進むように、環境委員会メンバーの森林施策知識充実を図る。また委員会側より要求があった。	無し 交通と食事を提供。

表26. スタディーツアーの経過

時	対象者	場所	内容
'90 Jun.	Mbabala Aの責任者10名	Ipala, Ihuwa	新規開発村落にあって、見本林
'90 Jul.	Mbabala Aの責任者10名	Zuzu(Orchard)	設置前に村の責任者にアグロフォー
'90 Jul.	Michese の責任者8名	Ipala, Ihuwa	レーストリーと植林プロジェクト
'90 Jul.	Michese の責任者8名	Zuzu(Orchard)	の理解を得るため。
'92 Apr.	Msalato中学校生徒 マリハイクラブ15名	Konbolo, Ihuwa	アグロフォーレーストリーを視察。 見本林を視察。
'92 Mar.	CDAスタッフ	GAIRO	GAIRO AGROFORESTRY AND LANDUSE PROJECTを視察。
'93 Mar.	Msalato農家 6名	Ipala, Nzuguni	アグロフォーレーストリーを視察。
'93 Apr.	Nzuguni, Ihuwa 農家	Mbabala, Michese	
'93 7	村の女性グループ	Nursery, Ihuwa	村落林業活動の理解。WIDが重要。
'94 Oct.	CDAスタッフ	Kvuni	DODOMA LANDUSE PROJECTの視察。

カレンダーが希少であるため買ってでも欲しいと言われる程評判の良いものとなった。これは、公共施設、コンタクトフーマー、それに人が多く集まる店に全200部数程無料配布された。

これらは、機材のワードプロセッサとパーソナルコンピューターを使用して作成され、経費は紙代だけという安価なものである。スタッフが機材の使用方法を覚えれば今後多種の配布物の刊行が可能となり、持続可能な普及手法の一つとなることが期待できる。

8) コンタクトフーマー

特に関係を密にして個人々人を対象に行う普及活動である。各村における後々の植栽活動のリーダー的存在になることを目的としている。これまでにも行われてきたが明確な記録が残ら

なかったり、ほとんどが長続きしなかった。この活動にとれる時間が少なかったというのがその理由である。しかし、活動の重点をコンタクトファーマーに移行し、それに関する普及手法を完備すればこれ程着実な成果が期待できるものは他に無いと筆者は考える。植栽準備から乾期の植栽木の状態まで一貫して見守ることができるため、村における苗木配布後の生存率を示すデータを期待することもできる。

'94年後半からVeyula: 2名、Msalato: 1名、Nala: 2名、Mbabala A: 1名、Michele: 2名を対象に活動を開始している。植栽・植栽後のメンテナンスを指導するが、特に目的意識を持つことに重点を置き計画の立て方を指導する。Veyulaの一人は三代目隊員から引き継がれた唯一人のコンタクトファーマーであるが、個人で苗畑を営み収入を得るようになったことは苗畑の項目で述べた通りである。植栽活動が自立・持続するまでには長期を要するが、日々の普及活動(巡回・接触を通して)から得られる対象者の活動の記録を残していくことが後々の活動の発展に不可欠であり、スタッフ側には記録整理を日常業務にすることを要求している。

10) 調査(生活・意識)

植栽普及活動はグリーンベルトを側面から支援するとともに村人の生活向上を目的としている。そのため、村人の生活状況・意識を把握することは普及活動の見直し・計画を進める上で重要となる。二代目隊員は各家庭における薪採集状況の調査をIhunwa、Nzuguniで行った。三代目隊員は村民の生活や問題点等を総合的に把握することを主目的にMichele、Msalato、Nzuguniにてアンケート調査を実施した。大変重要な結果を残していると思うが、筆者の怠慢によりその解釈を行っていない。したがって、活動自体へのフィードバックは行われていない。

二人の調査結果から特筆すべきこととしてNzuguniの各家庭における薪採集回数の変化をあげる。即ち、'91 Oct.の段階で月平均7回としているが'93 Aug.には週平均3回となり増加傾向にある。これを直接的に解釈して良いものかどうか決定できないが、村人の薪に対する需要は年々増しており我々の活動の成果は如何程であったのかと懸念される。

11) 予算状況

図7に村落林業部門の予算と物価の推移を示した。CDA予算は増加傾向にはない反面、労働者賃金やガソリン等の物価が急上昇している。

今年度の予算は前年度に比べて大幅に減少している。しかも、現金自体が滞っているため、CDAの予算申請で計画した活動を実行するためにやむを得ずJOCVの現地業務費を使用しているというのが現状である。CDAで労働者を雇って仕事をする場合、その賃金は1カ月あるいは2カ月以上遅れるのが普通である('80年代は日払いできていたと聞いている)。車庫の燃料費も1・2週間出ないことが度々で、スタッフが現場に赴けないことがよくある(JOCVと燃料費全体を折半する形で契約しているが、CDA側はそれすらも履行できない状態)。タンザニア人スタッフによれば、燃料費に関しては年々悪化の一途をたどっているとのことだ。緑化保全全部の仕事が止まるのではないかと懸念される。

それはまた、活動を進めていく上で種々の支援金に頼らざるを得ない状況に迫っているの

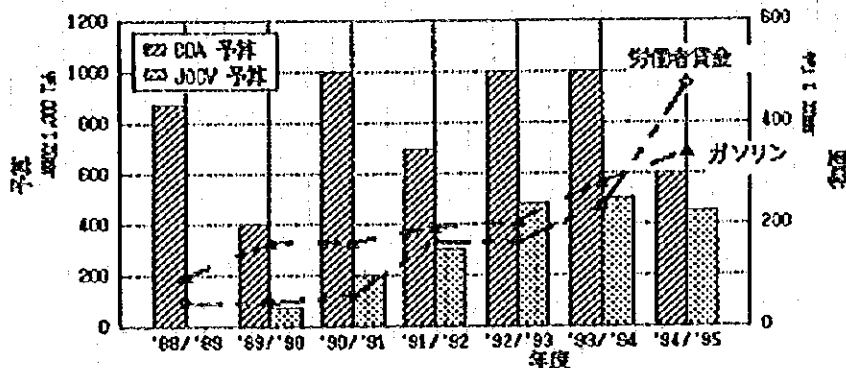


図7. 予算と物価の推移 CDAの予算は毎年度7月から翌年の6月まで、JOCVの予算は

4月から翌年の3月まで適用される。ガソリンはリットル、労働者賃金は一日当たりの額を示した。

かもしれない。'91/'92にはいくつかの小学校での灌漑水の提供・褒章等で、記録の残っている範囲で132,120Tshの支援金を使用した。'92/'93には小規模苗畑活動・その他の普及活動において合計2,418,965Tsh (Nzuguni診療所での揚水風車建設に際して小規模援助を大使館から得ていたがそれは含んでいない) というかなり高額な支援金を使用した。現在、筆者の担当する当部門は支援金を全く使用していない。

見本林施業・小規模苗畑等その多くの活動の立ち上げ段階において、今に比べてはるかに潤沢な資金によってスムーズに進んだであろうと考えられるが、その多くは現在の予算縮小にともない持続が困難なものになっていると筆者は感じている。今JOCVが退くことを仮定すると、多くの活動は直ちに停止するであろう。今後の物価上昇に対する予算削減傾向は免れないであろうから、持続可能ということに重点を置いて活動手法を見直す必要がある。

### 3. 活動手法の評価

これまで見てきた個々の活動経過をもとに総合的に考察を試みる。

#### 1) 見本林の必然性

見本林は当初共有林とも呼ばれていて、村落民の入会地的性格を考慮していた。CDAによる立ち上げ数年後には村への委譲の交渉が開始されるが、会談に費やされる労力に対してほとんど何の成果もない。それは村の自治体の問題(脆弱、村内部の対立、責任者に対する不信感等)が原因の一つとして挙げられる。委譲が成功しないことによりその管理はCDAが引き続けねばならず、森の完成度が低いために(CDAの予算が許すならば)施業にさらに金が次ぎ込まれる。膨大な金額が使われたのだから途中で止める訳にはいかない。ジレンマである。

自治体への委譲は成功しないというのが筆者の考えでありこれまでの隊員が示してきた結論である。ドドマにおけるもう一つの村落林業プロジェクトであるDOVAPでは同じように共有林を設置し環境委員会を設けて(三代目隊員による環境委員会設置は実はこれを参考にしたもの)村自治体への委譲を試みているが、自治体側が積極的に管理・施業しているものはない。村落林業において共有林を設けるのは一種の流行であった。共有林をつくれればその過程でずっと早い普及になると期待したものである。しかし、そこには自治体の壁の他に共有思想そのものにおける困難があることを指摘したい。即ち、自分で働いた分の報酬を直接自分が受け取ることができないということであり(村人全員が参加するとして直接報酬を得るとすればそれは極微のものになる。)、自分の食べる分も無いのにどうして慈善行為ができるのかということである。このようなものは恒産があって初めて成功する高度なものであろうし、ウジャマ政策が失敗した事を見れば村人全員の共有林が成功しないのも納得する。

反対に村への委譲ということを考えなければ、見本としての性格は活かされる。一個人、あるいは少人数が施業して自分たちの森を作ることである。労働者は特定できるし、報酬の取得も確実である。しかし、もはやこれは村の共有林ではない。

これまで引き継がれてきた見本林を継続させて見本としての性格を残すためには不特定多数の村人を労働者として期待するのではなく、専門に施業する労働者を一・二人雇い年中施業に当たらせる。賃金の代わりにそこから得られる報酬を彼らが得る。労働者は森を縮小させない方向で施業しなければならぬ。その施業状況を自治体が管理するのである。年々この体制で施業が続けばその過程においても見本としての目的は損なわれないし、やがて時期が来て村に受け皿が生じた時(真の?)共有林が誕生し一段と効果的なものになる。しかし、そのときは既に普及が成功していることになるだろう。このように筆者等は考えて、見本林活動の次なる段階へ向かっている。

ところで、今後新規の村落を対象にする場合、予算面から考えても村自治体による見本林を達成するのは得策ではない。見本となるものは公共施設あるいは筆者が一番効果的と考えているコンタクトファーマーを対象にした活動によって設置することができるし、それが一番効果的であると信じている。

## 2) 機材提供並びに各種物的援助

公共施設において植栽・苗畑施業に際して水槽建設の援助と灌水車提供が行われてきたが、燃料費の上昇にともない灌水車を提供し続けることが困難になっている。また、飲用水を苦勞して入手している村人を尻目に街の澄んだ水道水を村の特定の場所に植栽のためだけに運ぶのは心苦しいものがあることも事実である。それはまた、公共施設から村人個人個人への波及効果を考えたとき大きなマイナスになると考えられる。灌水用水を如何に入手しているのかはその地域における植栽活動の特徴となるべきものであり、なにも特別なことを必要とせず育木が可能であることを示すことこそ他の村人の納得を引き出す。確かに植栽後一・二年の灌水は生存率を高めるために必要であり、新規村落の普及初期において早急に見本となる植栽例を示すことも可能となり、またそれ自体が一つの成果として評価されてきた。しかし、灌水車の提供を受けずに労働者が各家庭から、あるいは施設から1・2km離れた井戸や雨季に出来る池から水を持って来て灌水している例もある。以前灌水車の提供が行われていたが、今ではそれに頼らずに灌水している対象施設がある。多くはないが無灌水で生存する植栽木も中にはある。これらのことを考えると、灌水車による灌水用水の提供は必ずしも必要でない。むしろ持続する植栽活動を目指するのであれば、灌水車に頼るのを止めなければならない。灌水車の無料提供を継続していくことは不可能なのだから、その地域で全く灌水用水が得られないのであれば、その地域での植栽活動を諦める以外ない。水条件が植栽を許容する場所から普及が始められるべきであり、その方がより効率が良い。

各種物的援助、特に作業道具に関しては上述したように必ずしも必要な訳ではなく、逆に作業者側が援助に頼りきってしまうのが怖い。実際、それなくして作業を行えているにもかかわらず次の援助を求める声を筆者等は聞く。彼らに植栽活動がCDAもしくはボランティアの人間のために行われるのだと勘違いされては困るのだ(そうした間違った言動が実際ある)。それよりも、作業者側の可能な範囲の作業と工夫することを促すほうが適切である。結局は、それが村の一般の人達に受け入れられ易い植栽活動を招くと筆者は信じている。

また、公共施設、特に小学校における褒章を設けることは初期の起動力を高めることにつながることは考えられる。が、これも褒章のためにやる気運が定着しては困る。(筆者等が良く耳にするのはサッカーボールを要求する声である。おそらく隊員が交代することによって言われ続けるのであろう。)適切な行動が望まれる。

井戸・揚水風車等の建造物は建造後の長期間の使用が可能であることを考えると確かに有用である。一方的に援助するのではなく村と一緒に力を出し合ってもらわなければならない。

機材提供を全て否定するのではない。トラクター(は労働時間の削減になるし植栽後の生存率を高めるであろう)や堆肥運搬車は年一度のことであり、公共施設あるいは一般の対象者側が努力して燃料費を捻出すれば毎年使用可能なものなのだ。公共施設にて初期に大量の植栽を行う場合に燃料費を含めて援助することもあるが、後々の自立して行える方向を考えなければならない。

## 3) 公共施設とコンタクトファーマー

村落共有林(見本林)と違い、特定の人間を相手にできることが公共施設の普及活動がスムーズに行える理由である。またその責任者の意向によるところが大きい。一応責任者等の自主活動が前提である。対象とする施設は村の中心に位置するのが普通であり、村人が通りがかることによってそこでの活動を簡単に見ることが出来る。村人がそれに惹かれ、それを参考に植栽活動を行うことを期待している。ところが、果たして公共施設の活動が村人に対して波及効果を持つであろうか?一般の村人との間に隔はないだろうか?責任者の自主活動ではあるが多くの働き手は自主参加ではないことを指摘したい。小学校では「農業の時間」を活動に当てているとはいえ、刑務所における植栽活動同様、強制的ですらある。働き手が理解していないとすればそれは教育ではないし、彼ら自身が各家庭にもたらす波及もない。また、その現場を見る一般の村人は自分たちの世界とは異質のものと考えられるようになることも懸念される。即ち、自主的でない労働者によって作業が行われ、あるいは大きな機材を投入して時には水道

水をわざわざ街から運んで木に飲ませているから可能なのだ判断してしまうことが考えられる。そうならないためにも一般の家庭でも可能な活動を公共施設においても考えなければならないし、労働者が理解するための場を考慮しなければならない。後者においては、映画会・出張講義を特定の対象者に絞って行うことに重点を置くことがその対策になると考える。

その点、コンタクトファーマーを設置することは理にかなっている。本人の自主参加が前提であるし、なによりも一般の人々との軋がないからである。多数を対象にはできないが、彼らの動向を見守ることができる。彼らに対する意識高揚と技術移転が着実に行われれば、後々隣人へ植栽活動が波及していくだろうし、彼ら自身が植栽活動のリーダーとなり得る。コンタクトファーマーの人材選定には混乱もある。村議会に紹介して貰っても、実際接触してみると普及が困難な人物も出てくる。しかしそれは通過点であり、良い人材が得られる迄探すのも活動の一環である。コンタクトファーマーに対する周囲の妬みが生まれるとする見解もあるが、逆にそのようなものが生じるのであればそれを普及に活かすこともできるだろう。うらやましいと思うことこそ自分もやってみようとする意欲につながるのだ。

公共施設のこれまでの活動は成果をもたらしつつある。そこから植栽意識が村人に伝わったケースもあるだろう。新規村落の普及を開始するとき公共施設は一番てっとり早い普及対象者となるだろう。しかし、それは村の局所的な活動でしかない。最終的には個人が植栽意識を抱くことが望まれるのである。今や村の個人を相手に活動を開始する時期に来ている。筆者はコンタクトファーマーの活動により重点を置く方針でいる。

#### 4) セミナーとスタディーツアー

セミナーは各村の責任者あるいは公共施設の責任者を一同に会してCDAの目的と仕事を大雑把に説明し理解を求め、また討論によって何らかの取り決めを行うことがその最大の目的であろう。しかし、専門的な技術を知識として勉強する場としては効果的ではない。その準備と実施の労力、開催費用を費やすよりも筆者等の巡回を通して技術移転していく方がずっときめ細かな普及になると筆者は考えている。

スタディーツアーは上述した通り、場所選定に問題がある。各村の土地条件に差異があるのだから、むしろ条件が等しい村内での見本例を示した方が良い。また、わざわざ他所に出かけていくよりもそれぞれの成功例を写真集にして示すことも可能で、一・二ヶ所の見本を見るより多くのものを見ることができ、それが植栽意欲を引き出すことが大いにあり得る。

セミナー・スタディーツアーに代わるものは幾らでもあり、それを実行するのが村落巡回であると筆者は考えている。

#### 5) 調査と評価

これまで行われてきた活動の全てにおいてそれがどれだけの効果を上げたかを知らない。村落林業においては村落民の多くが植栽活動を行い、その恩恵を被ることが最終的な目標である。そのような成功例は村単位、公共施設単位、個人を単位として探してもどこにも見られないことは事実である。しかしながら、着々とその方向に向かっていくことは考えられる。その程度を知るためにも種々の評価活動を実施しなければならないだろう。例えば、苗木配布後の生存率調査、村内のランダム抽出した単位面積当たりの植栽本数の調査、コンタクトファーマーを村人の代表者として見守ること、各家庭における生活状況特に燃料(木)の採取状況の変化を調べること等が考えられる。これらは過去と比較されるべきものであるから、後々も支障無く行えるものあるいは調査し易い内容である必要がある。以前はこうした評価が行われていなかったから筆者の代から足場を築いていく必要がある。

当部門の一番の目的はグリーンベルト保全にあることを考えると、グリーンベルト側における調査も望まれる。即ち、出火(放火)件数、家畜による被害状況、無断伐採件数の年々変化を知ることである。この結果は当然当部門に反映されるものでありまた部門間の関係を深めることにもつながるから、是非グリーンベルト関係者にはこのような調査を開始して頂きたい。

## 6) 持続性

植栽活動は最終的には自立・持続するものであることを目的としている。即ち、苗木生産から収穫まで全て村人の手でなされることが望まれる。したがって、そのサイクルが経済的に成り立つことが最終段階である。上述した一コソクトファーマーによる苗木販売の成功例はじめ、幾つかの公共施設においても苗木販売による収益を望む声を聞かれることはその方向に移行しつつあることを示すものと思われる。現在、造林樹種はCDAからの無料配布を行っているため販売に上るのは果樹や花きだけである。それはまた、村人の多くが造林樹種よりも果樹などを好むためでもある。それも一つの事実として受け入れねばならないのだが、薪や材など将来的に価値が付くものとして筆者等がより明確に一般樹種の目的とするところを示す努力をしなければならぬ。そして最終的には全ての樹種が売り買いされることを考えると、小規模苗畑の需要を増すためにも苗木の無料配布量を減少させる方向に進める必要がある。苗木無料供給の一番の目的は村での利用可能な森を造りグリーンベルトに頼らずとも生活可能にすることにある。その点無料配布量を減少させることは矛盾とも思えるが、将来的に望まれることに向かつて今足場を築いていくことが大切であると考えられる。

また、植栽活動が自立するまでには長期的な普及活動が必要である。CDAの予算削減傾向といずれはJOCVが退くことを考えると、普及活動の持続性をも考慮しなければならない。そのためには建造物設置や機材の無料提供、高額を要するようなセミナー・スタディーツアー等大がかりな活動を止めること。そして、対象とする土地の条件を考慮し、対象とする公共施設・個人の能力の範囲内で行うようにしなくてはならない。上述したような安価な普及道具（配布物・写真集等の小物類）を備えておくことも必要である。スタッフの中に、金に頼らずに行える手法を考えアイデアを出し合う雰囲気を作ることが大切である。このような静かだが持続可能な普及活動を筆者は目指している。

## 7) 記録の重要性

上に示した活動の経過をまとめるに当たって幾つかのデータと多くの活動の経過の詳細な記録が不足していることに悩まされた。これまでの隊員達によって残されたレポートから記録の読み落としがあったり筆者自身の努力が足りなかったりと至らなかつた点があったかもしれないが、カウンターパートに尋ねた幾つかの事柄について彼が答えられなかったというのも事実である。普及活動が長期的な展開になることを考えると、記録は重要かつ重大である。各村・公共施設への苗木配布数、公共施設へ援助された作業道具の内容、公共施設における造林面積等は言うまでもないが、活動における村人（公共施設においても）との接触内容、彼らの（植栽）活動の展開の詳細な記録はこれまでの普及活動の評価・反省材料となり次なるステップを左右するものである。したがって、大掛かりな計画を実行するよりも日常の村落巡回を通して得られる小さな事象に対して事細かな記録を残し整理することに努めたい。勿論、タンザニア人スタッフと一精になって行い、彼ら自身の中に記録が整理されて残ることが望まれる。

## 8) タンザニア人スタッフ

普及活動の持続性を考慮するならばタンザニア人スタッフ自身による活動の展開が望まれるのであり、そのためにも失敗を恐れず試行錯誤を重ねられる場造りに隊員等は努力しなければならない。CDA内で行われている幾つかの会議はそれに応えるものとして効果が既に出てきているであろう。しかし会議のみでなく日常的に小さな議論を重ねることによって互いの情報が浸透することになり、そのことによって種々のアイデアが得られる。そのことが彼らの活気ある活動を導くものとなると筆者は考えている。

4. 今後の方針

以上述べてきたことを考慮して、次のことを今後の方針として掲げる。

表27. 今後の方針

項目	方針
見本林	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新規開発村落を対象にすると、最終的に村自治体に管理・所有を委譲する目的を持った見本林は設置しない。</li> <li>・現在ある見本林は少人数（1, 2人）選賃を基本として村側（あるいはCDA）が労働者として雇い、報酬は森からのものとする。また、その労働者は森を持続させることを義務付けられる。そのように筆者等が指導していく。このような体制を村側に合意させる。見本としての目的を消滅させないために。</li> </ul>
公共施設	これまで通り重点を置くが、労働者に理解を求める活動を行う。また、一般の家庭でも可能な植栽活動であるように十分考慮する。
コンタクト ファーマー	重点を置く。彼らが最終的に各村の植栽活動の指導者となることを目指して。
苗木生産・ 配布	小規模苗圃の設置・運営は続けていき、それが経済的に成り立つことを目指す。そして村への苗木無料配布を縮小させる方向に持っていく。
物的援助	十分考慮の上適切なやり方で行い、特に奨励額には気を付ける。あえて給水車を使うことはしない。したがって、それを目当てにした水櫃の建設はしない。（各村の条件に適した普及活動であること。）
セミナー・スタ ディーツアー	セミナー・スタディーツアーは行わない（あるいは必要最小限に抑える）。その代替りのもの（手法）に重点を移す。
普及道具	配布物・写真集等の小物類（安上がりなもの）を作り（あるいはそのアイディアを募り）、村人の感心を引き付けることに努める。また、そのようなアイディアをスタッフ側から出易くなるような雰囲気造りに努める。
映画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者を絞った映画会を目指す。（あえて目に行えるような工夫をする。）</li> <li>・映画制作の充実を図る。CDAスタッフの協力を呼び掛ける。</li> </ul>
調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動評価が可能となるような調査を始める。</li> <li>・村人の生活・意識調査を継続する。</li> </ul>
記録	カウンターパートに記録の大切さを理解して貰い、その整理を日常の業務とする。

筆者は、静だが着実な活動を心掛け、普及活動が持続可能であることを目指している。

以上。



### Ⅲ. 測量部門

1991年7月以降J.O.C.V.の隊員が途絶えているが、現在は隊員のカウターパートとなるべきタンザニア人スタッフを中心に、グリーンベルトの境界線確定や都市計画に伴う測量を行っている。第2フェーズにおける測量の活動内容は下記に示す通りであるが、長い間J.O.C.V.隊員が不在だったため思うような予算の獲得ができず、仕事のない状態が続いている。特にグリーンベルトの境界線確定や内部測量などの、C.D.A.を中心として進められる仕事が全くとどこおっており、他組織から依頼された仕事を請け負っている状態である。1973年から第1フェーズ終了期間までに行われたグリーンベルト総測量面積は18,197ha（最終評価調査報告書参照）である。第2フェーズが始まってから1994年12月現在までのグリーンベルト総測量面積は4,259haである。境界線測量に関してはNYA NKALI地区を残すのみとなっている。

現在、隊員不在ということでC.D.A.側から隊員要請がでてきている。隊員全体の意見としても、境界線測量の終了、内部測量の実施、内業の充実等を目標とした測量隊員を期待しており、しいては測量部門の活性化につながると考えている。

〔表28〕 第2フェーズにおける測量部門の活動内容

日付	プロジェクト名	内容
02/JAN/1992	LYUMBU	5km
18/FEB/1992	MBWANGA	12ha
18/MAR/1992	CHIMWAGA	11.5km
18/MAY/1992	SINGE	
08/JUL/1992	MUMWA, SVASWA	AMENDMENT OF BOUNDARY 8.2km
24/AUG/1992	MALATO VILLAGE	10ha
01/OCT/1992	MKALAMA	9km
01/OCT/1992	IMAGI	6.4km
07/JAN/1993	ITEGA	REGIONAL SECURITY PLOT
17/FEB/1993	IMAGI	2.3km
03/MAR/1993	SINGE	AMENDMENT OF BOUNDARY 4km
27/JUL/1993	MKALAMA	5km
28/AUG/1993	BUNGE	5km
19/OCT/1993	MCHESE VILLAGE	CONFIRMATION OF BOUNDARY 4km
29/OCT/1993	IMAGI	3.3km
03/NOV/1993	MZUGUNI VILLAGE	CONFIRMATION OF BOUNDARY 1.4km
05/JAN/1994	MZUGUNI	NGO'S SITE 13ha
07/FEB/1994	NYANKALI	838.34ha
21/MAR/1994	ZUZU ORCHARD	
24/MAY/1994	NURSERY	
21/SEP/1994	MUMWA	DEMONSTRATION FARM

## IV ナーサリー部門

### 1. 目的

C.D.A. ナーサリーは、C.D.A.の緑化プロジェクトのための苗木及び花きの生産を目的として運営されている。また、市街地での緑化推進の一環として、一般市民への苗木、花きの販売も行っている。

### 2. 経過

#### 1) 予算

C.D.A.側から出資された金額は表-1のとおりである。このほかに、J.O.C.V.側からは、育苗用ポリエチレン・チューブ、そして農薬などの一部を現地業務費により援助している。

ここ数年、予算額の増加率は下がってきていたが、'94/95年度にはついに大幅な減額となった。これによる労働者の削減、燃料その他の不足が、ナーサリーの業務に深刻な影響を与えている。

[表29] ナーサリー予算

年度	金額 (T.sh)
91/92	9300000
92/93	11000000
93/94	12000000
94/95	5953540

#### 2) 生産樹種

現在C.D.A.の緑化プロジェクトには、グリーンベルト部門、村落林業部門、造園部門があり、プロジェクト用の苗木及び花きは、それぞれの部門からの要求に応じて生産される。

グリーンベルト植林用には、インドセンダン、タガヤサン、ユーカリ類などのような外来早生樹種のほか、自生樹種であるアカシア類が主要な樹種である。村落林業部門では、アグロフォレストリー用のギンネムやツノクサネムなどのマメ科樹木、学校などの公共機関での緑化用、薪炭材用樹木（インドセンダン、ギンネムなどのマルチパーパス・ツリーや、花木などが多い。）そして村人への普及用には、これらのような樹種のほか、果樹も重要である。

造園部門には、街路樹、ラウンド・アバウトへの植栽用、公園や住宅地での造園用に、様々な種類の樹木、花きを供給している。

### 3. 問題点

1) 育苗方法についての正確な記録、生産された苗木に関するデータ（数量、行き先、大きさなど）、生産過程におけるデータ（発芽率など）、種子採取に関するデータなどの記録や管理が不十分である。

2) 量的管理が不十分で、プロジェクトからの要求どりの樹種、本数が生産できていない。生産が難しく、必要本数が確保できない樹種については育苗方法の改良が必要である。しかし多くの樹種については、むしろ毎年苗木が余る傾向にあり、これはフォレスター側の予算的問題による計画縮小も原因である。ナーサリー側の問題は、正確な発芽率、得苗率がわかっていないため、とにかく多めに生産していることである。

3) 質的管理も充分でない。注文どおりの規格（サイズ）の苗木が生産されていないことがあり、大きさにバラツキも多い。このバラツキの原因のひとつには、育苗に用いるチューブの長さがふぞろいであることがあげられていた。しかし今年度からは、チューブ切り器を使い始めたことにより、その点は改善されるであろう。

#### 4. 今後の方針

##### 1) 過去の隊員活動

- a. 有用自生樹種の育苗実験
- b. ナーサリー・テクニク・マニュアルの作成
- c. データ記録用フォームを作成し、データ管理を推進
- d. 近隣の学校等の小規模苗畑での支援活動

##### 2) 今後の計画

- a. 自生樹種の育苗実験は今後も続ける。
- b. 植生調査、生長量調査などサイトでの調査も行い、それぞれの立地条件に適した樹種の選定の参考資料を作る。
- c. 小規模苗畑の支援は今後も継続し、さらに新規の要請があれば応じる。

## V. 造園部門

### 1. 目的

- ・マスタープランにおけるグリーン・ベルト内部の市街地の緑化を行う。
- ・仕事の範囲はDEEMのプログラムに限定せず、外注の仕事も行う。
- ・仕事の優先順位はDEEMのプログラムとする。
- ・仕事の内容は、設計から施工・管理まで全てに渡る。
- ・市街地区緑化対象地域の緑化終了をもって造園事業終了とする。

### 2. 経過

1) 1986/87～1992/93までの第1フェーズの6年間で、総面積503.6ha、その内緑地面積95.63haの緑化を完了している。

2) 1992/93～1993/94の主な活動内容は以下の通りである。

中学校への植栽指導  
 エリアD・NPE設計  
 ストーン建設・前庭の植栽  
 ラウンド・アバウトの看板の除去  
 ボンベ・リバーの設計  
 子供庭園のシーソー設計  
 NURASRYの日本庭園設計  
 MOROGOROの教会の造園設計等

3) DEEM造園課において、92/93, 93/94, 94/95の業務内容は以下の通りである。第1フェーズに比べ、新規開発エリアが極端に減少し予算のほとんどが管理に使われている。

[表30] 施業実績

YEAR	PLACE	GREEN AREA
92/93	CONSOLIDATION OF LANDSCAPE	295 ha
	DEVELOPMENT OF POMBERIVER	5 ha
93/94	MAINTAINACE OF LANDSCAPE WORKS	300 ha
	DEVELOPMENT OF NKNIUNGU OPEN SPACE	8 ha
94/95	CONSOLIDATION OF LANDSCAPE WORKS	308 ha

4) 1994.8～95.1の活動（隊員の行った設計）

エリアCウォークウェイの植栽設計  
 ラウンド・アバウトの植栽設計  
 個人病院の造園設計

このうち、エリアCにおいては長岡農業高校からの寄付金、ラウンド・アバウトにおいてはJICA20周年記念事業費にて施工されている。また、個人病院は民間業務と思われる。

### 3. 問題点・考察

- 1) 代々の隊員は造園課において造園設計士として位置づけられ、多くの設計業務をこなしてきている。C.D.A.の職員である2人の造園設計士は、設計・設計後の見積作業をおこなっている。また、民間の設計業務も行っていると思われる。隊員も上のクラスの人から民間の設計を頼まれる事がある。
- 2) 新規開発エリアが無い現状の中で現在DEEMが設計しているものは、寄付金等のJ.O.C.V.側からの予算以外のものは全てDEEMのプログラム以外の業務であり、他の政府機関から要請を受けたものと民間業務である。明らかに民間の設計（C.D.A.の仕事以外のもの）については、隊員の仕事とされるのは疑問を感じる。
- 3) また、3人いる設計士（隊員も含め）のうち一番仕事量が多いのが隊員であり、他の2人は実際何をしているのか疑問に思う時もある。例えば2人が呼ばれ現場を見せられた後、設計するのは隊員でありそれが当然の様に想われているところがある。（技術的に期待してくれているのであろうか？）各個人が1つ1つ別々の設計を行っており、技術移転という感じではない。
- 4) この2、3年C.D.A.側の予算は減ってきており、設計の仕事も減少している。このような中で3人もの設計士は必要がないと考えられる。今後現在の設計業務を行いつつ、少しずつ仕事の方向性を変えていく必要があると考える。

### 4. 今後の方針

- ・DEEMのプログラムである新都市タウンエリア内（グリーンベルトの内側）の緑化に関わる設計業務、他の政府機関から要請を受けた設計業務を引き続き行う。
- ・他の隊員との共同による緑化計画（村の学校・教会等への緑花）、村の街路樹の維持管理（ンズグニ・イフーマ）、ナーサリーでの育苗実験（苗出し期における樹木規格の向上）等を行い、図面作成業務に限らず、実践的な造園の活動を行っていきたい。

## V. ガレージ部門

1988年に始まったガレージも私で3代目隊員となり、第2フェーズも半ばを過ぎようとしている。立ち上がりから日本の車両、部品、工具等の導入、多額の予算そしてそれらが増えることにガレージのスペース拡張、コンクリート敷き、ゲート増設、屋根を完成させガレージの設備は十分なものとなった。ここにガレージの現状を報告する。

### 1. 車両状況(1995.2月)

1. NISSAN W.CABIN 約120000km走行 (積波済み)
2. NISSAN S.CABIN 約79000km走行
3. NISSAN CABSTAR 1.5t 約145000km走行 (積波済み)
4. NISSAN CABSTAR 3t 約95000km走行
5. ISUZU TANKLORRY/water bozzer 約74000km走行 (積波済み)
6. ISUZU TANKLORRY/water bozzer 約40000km走行 (積波済み)
7. ISUZU 7tDUMP TIPPER 約110000km走行 (積波済み)
8. ISUZU 7tTRUCK LONG BASE 約85000km走行 (積波済み)
9. NISSAN PATROL 約165000km走行 (積波済み)
10. KUBOTA TRACTOR 2台 走行時間不明
11. KUBOTA TRACTOR 約250時間走行
12. TRALER 2台
13. YAMAHA DT100 16台 4~5台を除き、約50000km~80000km走行(新車2台在庫)
14. YAMAHA AG100 2台 約20000~30000km走行 (新車3台在庫)
15. D6D

### 2. 各車両への対応

#### 1) 定期点検の実行

各車両とも月一で日を決め点検を実行している。故障車に対しては随時修理をしている。故障車の修理によく手間取り、スケジュール通りにいかないことがよくあるが、必ず月一回みるようにしている。

#### 2) 部品

いずれの車両も一番の問題はスペアパーツである。溶接、加工、流用などでカバーできる部分はあるが、結局パーツ交換という手段に頼らざるを得ない。ガレージに在庫部品はかなりあるのだが、ないものも多々ある。現場で手に入れる事がなかなか難しく、なんとかごまかして乗って、日本から部品が来るのを待っている車両がある。

#### 3) 管理

使用方法などに関しては見える範囲では指示は出しているが、基本的には個人の自覚に頼っている。整備もできる範囲で個人、個人でやってもらうようにしている。

### 3. ガレージ倉庫

ガレージとして十分な設備となったわけだが、機材等の多さに比べ倉庫内のスペースがなくなってきた。

車両の、どこが破損して、どこが故障して、どんなパーツが必要になるかという細かい予測が難しく、そのため大まかな予測で取り寄せたため、現在使われていないパーツがたくさんある。これらもいつ必要になるかわからないので在庫として保管しておかなければならない。車種ごとにそろえなければならないのでかなり膨大な数でもあり、またこれから増えることも考え、管理・保管・整理方法を考えることが必要。

### 4. ガレージスタッフ (カウンターパート 2名)

ガレージ発足当時から今までやってきた2人で、同じ仕事、同じ車両に関しての経験は十分である。この先も、ニュータイプの車がこないかぎり問題はない技術は身につけている。ここまできたらガレージは自分達で運営していくんだ、という意識を植え付けていく手助けがいる。

### 5. 車両譲渡

プロジェクト車両として37台保有しているが、5台ほど譲渡済みである。規定によればプロジェクト終了まで全て供与するとなっているが、第2フェーズも中間にさしかかったにもかかわらず、まだ5台のみである。C.D.A.名義となった5台だけについてもC.D.A.で保険掛金を払えず、車が何週間も動けないという状況がしばしばある。このことが、譲渡がうまく進んでいない理由となっている。規定にそってこの先にも考えず渡してしまったら、車両の本来の意味が無くなってしまおう。これからの期間で様子を見て、C.D.A.が本当に管理できる範囲で譲渡はすすめるべきだろう。

### 6. 総観

現在、緑の推進協力プロジェクトのサポートをすることで機能しているガレージである。プロジェクト推進には車両が欠かせないものであり、その車両がいつでも使えるように態勢をととのえている。

どの車両も走行距離が進んでいてあちこちガタがきているが、できるだけ修理・部品交換で対応している。一番重要な部品はこちらでは手に入りやすく、本邦購送に頼っている。その莫大な費用、申請から1年近くもかかること、そして、ゆくゆくはガレージに対する援助がなくなるのを考えると、タンザニアだけで部品を調達できる車両を機材として導入すべきであった。事前の調査がきっちり行われていなかったのではないのだろうか。車は距離・年数を重ねるごとに故障箇所が増えていく。本邦購送に頼る比率はこれからも変わることがないであろう。

さて、これからの運営としては、J.O.C.V.主体の形からなるべくC.D.A.主体に移行していかねばならない。C.D.A.から全く予算がでない今年度のような状態がいつまでも続くとガレージとしては仕事が進まないの、一般民間ガレージとしての機能を持たせる方向に進めていくべきである。ようするに、プロジェクト車両以外の車も整備して利益をあげるということである。プロジェクト部長もその意向を持っており、これからその道を探っていくところである。J.O.C.V.としては、現ガレージがそういった一民間ガレージとしての機能をもつまで、プロジェクト車両整備業務も並行して行っていくことは言うまでもない。

## 隊員雑感 . . .

### 野伸一成 (H4-1) -プロジェクトの今後-

95年3月現在で、プロジェクト期間も3年余を残すところとなった。この時点でプロジェクトの今後について考える事は、どの様に終わらせるか、ということの一点である。

どの様な形で終われば、その後のC.D.A.にとって有意義であるのか、それまでにどのような活動を行うべきか。また、隊員各自の活動とは別にプロジェクトとしてどのような結果を出すか。

C.D.A.では、これまで10年近い隊員活動が続けられ、それなりの成果は出ている。また、第1フェーズ最終報告書や各種の記録の蓄積が残る。幸いこの報告書も、現在のドドマの大半メンバーが赴任から1年を経過し、なお任期を1年以上残すこのに時期にまとめることが出来た。既に前述しているが、この報告書が過去の諸記録と共に各自の隊員活動とプロジェクトのあり方について検討する際に、一助となることを期待する。

### 街藤 敬 (H5-1)

C.D.A.は今、色々な意味で転換期を迎えている。そこでJ.O.C.V.隊員がどれだけ助言ができて、どんな方向転換を提言することができるかが、今後のC.D.A.の存続の価値を見出す上でも重要であると思われる。

そこで今後考えていかなければならないことは、グリーンベルトを造成していく上で、村落林業部門とどのようにして関わり合いを持っていくかということである。現在必ずしもグリーンベルトに関係しているスタッフと村落林業に関わっているスタッフがお互いの仕事を理解し合って仕事を進めているとは思われない。一部映画会などの企画は少しづつ協力し合っているが、村落林業部門の大きな仕事の1つである、グリーンベルト造成に関する村人との諸問題(生活、放牧、伐採など)の解決、その為の普及活動が1つの大きな活動方針である。そのことを考えると、まだまだ双方の協力関係は密接ではない。先に述べたように、特にIMAGI地区では村人との間で問題が多く、村落林業部門で行われているような普及活動をやらざるをえない状況である。しかしながら、どのようにして村人と関わり合っていくかという事がよくわからず、苗木の無料配布を行って欲しいというような村人からの要求に応じ、その代わりにグリーンベルトの意義を理解してもらうきっかけを掴めればよいと考えている段階である。私としては今後、村落林業に関わっているスタッフに助言をもらいながら、グリーンベルト造成を目的とした村落林業に係わっていく必要があると考えている。(グリーンベルトと一部関係のある村で、1994年末貯水池を作った。これは村からの要求で、目的は乾季における生活用水の確保及び家畜の水飲み場である。これを作ることで、①村人の生活が楽になる、②家畜に水を飲ませるためにグリーンベルト内を通していたが、それをしなくて済む、③グリーンベルト内ではないが、木を植えることができるようになる、など利点が多かったので、C.D.A.で管理しているブルドーザーと運転手を派遣させる。ただし燃料費は村で負担。現在この村と関係のあるグリーンベルト内ではあまり問題は発生していない。)

次に現在グリーンベルト内で問題になっている土壌侵食について述べる。グリーンベルト内にはいたる所に大小様々な土壌侵食が発生している。原因は雨量強度が強いため、過度な森林伐採、無計画な畑の造成、家畜の放牧などが挙げられる。どれも根本的な解決策は無く、どうすれば現在の土壌侵食を抑えることができるかを中心に活動をしている。タンザニア人スタッフに対しても、土壌侵食の基本的な概念を教えたり、土壌侵食を抑える簡単な方法を実際にモデルを作って教えたりしている。数年前から隊員が土壌侵食を抑える方法をスタッフに教えてきていたので、彼らはその重要性について充分理解をしているが、村人は全然理解をしていないと言っても言い



過ぎではないと思う。今後は村落林業部門での、木を植えることの意義を普及すると同時に、土壌侵食防止の面から見た生活一般（住居、放牧、耕作、伐採など）の普及も必要と思われる。

#### 津田俊彦 (B5-1) 一他部門の業務に関する雑感一

##### グリーンベルト部門の業務に関して

本プロジェクトの主業務である新首都の緑化を担うグリーンベルト部門の業務について考える際、どうしても抵抗を感じるのにはマスタープランの中でグリーンベルトの境界線が描かれる際、村の境界線がどのようになっているのかがほとんど考慮されなかったということである。このような経過で出来た境界線がグリーンベルト部門の業務を進める上での全ての基礎になっており、このことがこのプロジェクトのアキレス腱のように思われる。

ドドマに限らず、例えば砂漠化の危機にさらされているような環境の厳しい地域で緑化を行おうとする場合、長期的な利益というのは理解されにくく、地域住民との間に短期的な利害の対立は充分起こり得るが、それを防ぐには計画段階での十分な調査と事前の説明まで含めたトラブル解決のための対策が不可欠である。

ところがドドマのグリーンベルトでは既に存在する村落をその中に飲み込んだり、境界線によって分断するような形で描かれている。こういった村落の境界線はゴゴ族が勝手に住みついて決めたものではなく、ウジャマー政策下で家の引き倒し等のかかなり強引な方法も交えて旧来の散村形態を放棄させられた結果できたものである。ゴゴ族にしてみれば政府にここに住めと言われて連れてこられた土地にC.D.A.がやって来て「ここはグリーンベルトに引っかかっているから立ち退け」と言われたわけで、これではトラブルが起きない方がおかしい。またそういった複雑な背景があるにも関わらず過去のグリーンベルトの施策において力づくで村人を追い立てるようなことが行われたこと、またこの部門の隊員の中に「ゴゴ族=敵」という構図が受け継がれていたこと、これらはまことに残念なことである。隊員によって作られたゴゴ族を悪者に仕立て上げた映画もあった。

現在はタンザニア全土の経済状態悪化を受けC.D.A.の予算状況も悪化の一途を辿っているため、補償金を払って住民を立ち退かせたり、警備員の数を増やして取締りを強化するような方法は取れず、住民との協力関係を作ってC.D.A.=グリーンベルトに対する悪い感情を刺激しないような方向で施策が進んでいるようでわずかな期待を抱いている。

C.D.A.の予算に余裕があったときに、遠まわりでもこのような形で施策が進められていたら村人に対する森林の重要性の啓蒙効果はずっと上がっていたのではないと思われる。

一部のサイト行われている砂等の不法採取やグリーンベルトとわかっていながら後から入ってきて家を建てて居住権を主張するようなケースには漸固とした処置を取るべきであるが、これらは一般の村人の生活と密接に関わる諸活動とは区別されるべき性質のものである。

Michese村のように周囲をグリーンベルトに囲まれた村では厳密に法律を適用すれば牛を放牧することも薪を取ることでもできなくなる。これは明らかに計画段階でのミスであってこういうケースには弾力的な対応が当然必要である。

本来こういった問題の解決のためにできた村落林業部門だったが、従来はグリーンベルト部門との協力関係が希薄であったため問題解決には自ずと限界があった。それでも永年の活動によって村人の森林の機能についての認識は深まっていると考えられる。今後は両者間の協力関係をより密に保ち、トラブルが起きても穏やかな形で解決していけるようにしたいものである。

## 執 筆 者

---

野仲一成 (H4-1 森林経営)

荒川 泊 (H4-1 野菜)

津田俊彦 (H5-1 果樹)

衛藤 徹 (H5-1 森林経営)

佐伯奈々江 (H5-1 森林経営)

加藤 渉 (H5-2 森林経営)

菊池英顕 (H5-2 自動車整備)

吉川 健 (H5-3 野菜)

福田まゆみ (H6-1 造園)

---

編集：吉川 健







JICA